

人の心を動かす「音楽」

岩手県一関市立磐井中学校

三年 伊藤 景 祐

僕にちからをくれたもの、それは「音楽」です。一年生の時、僕は吹奏楽部に入部しました。しかし、男子部員は僕だけで少し戸惑ったこともありましたが、それでも続けることができたのは、話すことが苦手な僕にとって音楽は会話をしている気持ちになることができたからです。それに、僕はみんなと、伝えたい音楽を奏でたいという強い気持ちを持っていたからなのです。

僕は、母の転勤で大槌町の赤浜小学校に入学しました。全校三十六名の小さな学校で、遠足や焼き芋大会などいつもみんなと楽しく活動していました。町内音楽発表会は全校で参加。どう歌えば合唱になるのか分からない僕は、「声がでかい。」と音楽の先生に言われたことを思い出します。

東日本大震災が起きてから、すべてが激変しました。あの日、避難場所になっていた校庭にいた僕は、「逃げろ。」という叫び声でちりぢりに裏山に逃げて行くみんなと違って、足がすくんで動けなくなっていました。ふり返った母に手を強く引つ張られた時は、足元に黒い波がありました。後はあまり覚えていません。ただ、いつも聞こえていた活気ある街の音などが、何一つ残ることなく奪われていました。

僕の耳には、泣き叫ぶ人達の声、黒い波に壊された電柱の電線が切れる音、家々がぶつかりあって崩れていく不気味な音だけが重く頭に響くだけでした。

暗くなってきたので、地域の人が探してくれた民家に、一・二年生十人と担任の先生達で泊めてもらうことになりました。少しのお菓子をみんなで分け合いました。その間にも、ガスボンベの爆発する音が波の音とともに遠くから聞こえてきました。

四月になって、被災した校舎の二階に登校することになりました。一時間目は支援されたドリルで勉強し、二時間目は運動です。裏山までみんなで散歩しました。その頃の僕は風の「ゴーツ」という音や、雨の「ザーツ」という音でさえも聞くのがとても苦しくて、耳をふさいでは泣いていました。それらの音を聞くと胸がどきどきして息がうまくできなくなるのです。高学年になって、対処の仕方を覚えてからは泣かなくなりましたが、そのどきどきは小学校卒業近くまで続いていたと思います。

しかし、二つ楽しかった音がありました。一つは、歌手の八神純子さんと一緒に歌った時の音です。たびたび大槌に支援に来てくださった八神さんと大槌町四校の四年生七十四人で、「枯れ木に花を咲かせましょう」という曲をCDに録音することになったのです。その時僕は、歌のタイトルが「不協和音でも和音を奏でましょう」と言っているように思いました。つまり、「嫌なことがあってもポジティブに前向きに考えれば、きっと良い音になる。」と教えてくれた気がしたのでした。

二つ目は、支援で届けられた楽器の音です。その時に一関に戻ることが決まったので、一カ月間だけたけれど、リズム良く小太鼓を叩くことができてからは、僕は自分の奏でた音で心地よい気持ちになれることに気がしました。

そして、現在。吹奏楽部に入部してからの僕は、支援されていた側から支援する側に立って活動することができています。

中学一年の時は、宮城県女川町に行きました。岩手県教育レク研究会のわくわく隊の仲間と千葉県柏市から来た柏レイソルダンサーズと一緒に女川の子供達との交流会に参加しました。ゲームを通して一緒に遊んだ時は、お互い緊張していて顔が引きつっていたのに、柏レイソルダンサーズが音楽に合わせてダンスをした時は、曲に合わせて体を動かしたり、まねをして踊ったりする子が少しずつ増えていきました。

中学二年の時は、大船渡市と陸前高田市に行き、お年寄りの方達と一緒にダンスで交流しました。最初は照れ笑いだったおばあちゃん達が、大きな口を開け、顔の前で大きく手を振りながら笑う姿に、いつの間にか僕もつられて笑っていました。

音楽は元気の源になり、また、人の心を動かし活気づけることを僕は改めて学びました。

僕は、いつもそばにいた祖父の行方がいまだ分からない悲しみを乗り越えて、音楽とともに成長していると感じています。これからも吹奏楽に関わり、人の心を動かす音楽を演奏していきたいと思えます。

僕に前向きに生きる力をくれた「音」との出会い。これからも多くの音との出会いを大切にしていきたいです。